五四運動の研究　第二函

4　五四時期の民族紡績業　　森　時彦
5　虞洽卿について　　陳　來幸
　—近代中國における資本家の一典型
6　宋則久と天津の國貨提唱運動　　林原　文子
7　華洋義賑會と中國農村　　川井　悟

副島昭一

本書は京都大學人文科學研究所共同研究報告『五四運動の研究』シリーズの第二函として刊行されたものであり、森時彦「五四時期の民族紡績業」、陳來幸「虞洽卿について」、林原文子「宋則久と天津の國貨提唱運動」、川井悟「華洋義賑會と中國農村」の四篇が收められている。表題からもうかがえるように、第二函はこの時期の經濟關係を中心とした論考によって構成されているが、とりあえずはそれぞれが獨立の論文であるので、個別にみていき、全體の關連性については後に考えてみたい。

森　時彦「五四時期の民族紡績業」

本稿は森氏によれば「誕生以來ほとんど一貫して停滯的でなければ不況にあえいでいた民族紡績業が、五四時期にかぎってだけは、なぜ例外的にも、『黃金時期』と稱されるほどの發展（あるいは擴大）を謳歌しえた」のかという「疑問をときほぐすことを當面の課題」として執筆されている（八頁）。この目的の下に本稿では中國紡績業をめぐる市場環境に分析の最大の重點がおかれている。

本稿を手にした讀者はまずその統計圖表の膨大な量に壓倒されるであろう。市場分析に統計的分析は不可缺であるが、十分な統計數字が完備されていないこの時期について、精力的に統計資料を蒐集し、まことに緻密な處理がほどこされ、統計の不足・缺落は推定による確定作業を通じて、市場環境の定量的分析が徹底的に行なわれている。また具體的な市況分析においても、この方面の用語を藥籠中の物としてたくみに使いこなされている。このような分析を通じて、たとえば棉花の價格低下の原因が、棉花の豐作であるというような常識的理解にとどまるのではなく、窮極的に中國固有の市場構造—基本的に國際的に規定される—を通じて顯現することを論證している。ともあれ周到緻密な統計處理による分析は、この時期の經濟史研究の新たな水準をきり拓いたものといえよう。そのような劃期的な意義を確認した上で若干氣づいたことをのべておきたい。

一、まず第一は本稿で使用されている「中國紡績業」という概念についてである。森氏は「中國紡績業」を「資本の國籍をとわず、當時の中國國土（租界などをもふくむ）で營まれていた紡績業のすべてを包含する」（一〇八頁）ことばとして用いている。いわば地理的な概念で、そのかぎりではなんら問題はないが、しかし「中國紡績業」の「發展」、さらには「自給率」というような、それ自身固有の實體を有する概念にまで高められてくると誤解を生じやすくなるのではないか。端的に言って「在華紡」は「日本紡績業」なのか、「中國紡績業」の範疇に入るのか。五四以前、本格的な過剩資本の輸出によらず、また民族紡との對立關係も本格的ではない「在華紡」の段階では、「中國紡績業」と一括しても、とくに不都合はないが、

五四以降になると、日本紡績資本の本格的資本輸出による「在華紡」の飛躍的増加により、明瞭に民族紡と對立關係を形成していく。また森氏も指摘しているように、民衆の意識の面においても、「在華紡」綿絲を「日貨とみなす認識が定着した」(四五頁)。とすれば客觀的經濟關係においても、意識の面においても、五四以降、「中國紡績業」に地理的概念以上の意味を持たせることは無理があろう。たとえば、一九二七年に中國が「綿絲の輸出國に轉じた」(七頁)とか、あるいは「大戰期を通じて中國紡績業がその綿糸自給率を飛躍的に高めた」(二四頁)という指摘は、現象自體の指摘としてはその通りかもしれないが、帝國主義支配下の外國資本による生産を含めて「輸出國」あるいは「自給」ということにどのような意味があるか吟味されてしかるべきであろう。もちろん森氏はこの內實は「在華紡」が大部分を占めると指摘しているので、單に用語上の問題に過ぎないともいえるが、このような敍述はむしろ論旨を混亂させてしまうのではないかと感じる。これと關連して中國綿絲—輸入綿絲という對抗關係の設定がどの時期まで有效かも檢討される必要があろう。

二、民族紡績業の「黃金時期」の背景となった「紗貴花賤」現象は國際的條件の有利な展開が生み出したことを森氏は論證している。これはまことに說得力のある論證である。そしてこの「紗貴花賤」が五四運動と同じ時期に出現したことが、民族紡績業者の冷靜な情勢判斷を妨げ、無謀な設備投資に走らせたとしている(七二〜七三頁)。ここでは五四運動と「紗貴花賤」の時期的一致は偶然的なものとみなされている。しかし一方で森氏は少なくとも中國綿絲價格の高騰をもたらした三種の綿絲の格付價格の崩壞は五四の日貨ボイコットがもたらしたものであり、一時的に經濟外的要因が、「經濟法則を無效にした事例として特筆すべき」ことをのべている(三八頁)。「紗貴花賤」と五四の時期的一致について「偶然」というのは、單に修辭上の問題で、ことさらにあげつらう必要もないかもしれないが、五四運動の國際的條件と、「黃金時期」をもたらした國際的條件の連關性はどのように考えればいいのかということはやはり問題となろう。

三、森氏は五四期における紡績ブームの「本質」を戴季陶の「紅利〔割增配當〕四〇%、これこそが中國紳士の愛國心を刺激した最大の興奮劑であった」という言葉につきると述べている(七〇頁)。民族紡績資本家は常に徹底的に利潤のみを求める階級としてとらえるのが本稿全體の基調にあり、この指摘自體もその上でなされたものであろう。これは「本質」というものをどの次元で考えるかということにもかかわってくると思われるが、投資家の動機に本質をみるのではなく、それだけの配當がなければ資本が產業資本化しないという當該段階の資本の存在構造こそ本質というべきではなかろうか。

このようなブルジョワジーの「本質」規定から直接に當該段階のブルジョワジーの性格を導き出す方法は、森氏が從來の五四運動と民族工業の關連づけを批判したことばを借りて表現すれば、「短絡的」という印象を免れえない。そしてこのことはブルジョワジーの政治運動に相對的に低い評價を與えることに連なっていると思われる。すなわち旅大ボイコット運動に關連して森氏はボイコットの效果と限界に言及し、ボイコットの效果は「國際的要因の許容する範圍から逸脫しうるのではなく」、「マイナスをプラスに轉ずる魔法の

杖でない」こと、このことが「民族紡績業者にのこした最大の教訓」であり、民族紡は國際的諸要因が好轉するまで「逆境にひたすらたえしのぶほか、なすすべを知らなかった」と言っている（一〇三頁）。ボイコットの效果と限界を綿絲の番手別に明らかにしているのは本稿のすぐれた指摘である。しかしここで「最大の教訓」がもたらすものが、結局たえしのぶ以外にないというのは、この時點および以降の中國における資本主義の展開に暗い見通しと否定的評價を與えていることに關わると考えられる。「黄金時期」およびそれ以降の不況は中國經濟史の中でどのような意味をもったのか、「黄金時期」は結局一場の夢に過ぎなかったのか、それとも「黄金時期」とそれ以降の不況期を通じて、中國においても資本主義的蓄積構造が形成されていったのか否かについては本稿ではふれられていない。國際的市場構造を通じて照し出されたこの時期の紡績業（紡績業にとどまるのではもちろんないが）を中國經濟史の中でどのように位置づけるかという課題は殘されていると思う。

陳　來幸「虞洽卿について
―近代中國における資本家の一典型」

虞洽卿については從來の中國近現代史研究では、買辦ブルジョワジーの代表的存在とみなされ、民族解放運動の觀點からは否定的評價しか與えられてこなかった。評者はかつて一九二〇年代の日本のブルジョワジーの中國政策について若干調べたことがあるが、その際、當時日本側では虞については中國民族資本を代表する資本家とみなしていることに氣づき、日本史、中國史それぞれの側からみた同一人物に對する評價の齟齬を感ぜざるを得なかった經驗がある（「一九二〇年代のブルジョワジーの中國政策」、『日本史研究』一五〇・一五一合併號）。そしてこれは民族解放運動研究の側からの視角と帝國主義支配研究の視角の違いに基づくもので、その溝は容易には埋められないのではないかという感想を持ってきた。そういうことを思いうかべるとき、この論文が、しかも本シリーズの一冊として登場してきたのは、大げさにいえば隔世の感を抱かせるのである。

陳氏によればアメリカの近年の研究では、虞の一生が純粋な民族主義によって貫かれているという評價が出されてきているという。中國でも洋務運動評價の動きと關連して、虞のような從來否定的にしか描かれてこなかった人物を再評價しようという主張が最近丁日初、杜恂誠氏らによってなされている。陳氏も評價の觀點においては基本的にこの丁氏らの論文の枠組に依據し、とくに「虞がたずさわった企業活動の實態と發展情況を究明することに主眼を置き、かれの經濟界における基盤の擴大と地位の上昇を經とし、その社會的政治的諸活動を緯として」（一二頁）、彼の一生を敍述している。

本稿を通じて陳氏は從來具體的にはあまり知られていなかった虞洽卿像を提示している。陳氏は虞の寧波出身者としての強い同郷意識を強調し、彼の行動原理の一つをそこに見出し、そしてこの同郷意識を彼の民族意識の「原型」として評價し、この民族意識の最初の現れとして、上海租界における中國人の地位向上・參政をめざす「華人運動」への參加が紹介されている。この運動への持續的積極的參加も從來の買辦イメージだけではとらえきれないものである。また五四運動期における虞の行動についても、一方で總商會の理事

として、他方では商業公團連合會幹事として、その對立した局面における虞自身の矛盾・葛藤が描かれている。本稿を通じて虞洽卿評價の再檢討を迫る多くの事實が紹介されているといえよう。

さて陳氏は虞の寧波出身者としての強い同郷意識を強調し、彼の行動原理の一つをそこに求め、さらにブルジョワジー内部の相互關係についても同郷組織たる幇の活動を重視して、たとえば一九二九—三〇年の上海の商人團體の整理問題もこの角度からみている。陳氏はこの整理を、一つは國民黨の發言力の確保、一つは廣東幇を總商會から驅逐するという意義をもったものとしてとらえている。かつて西村成雄氏は、陳氏も他の箇所で參照している論文で、この閒の動きを南京政權による中小ブルジョワジーの政治的影響力の排除と大ブルジョワジーの政治的結集として位置づけた(『講座・中國近現代史・5』、「一九二〇年代權力構造の變動とブルジョアジー」)。評者には雙方の當否を論ずる準備はないが、本稿全體にもかかわることとして、ブルジョワジー内部の階層の問題を陳氏がどうとらえているかという問題は殘されていると思う。虞洽卿を半植民地條件下における中國資本主義發展を擔う一つの典型として描いているが、他にどのような典型が存在したのか。本稿では虞の歩んだ道が中國人資本家としてもっとも必然的・典型的であったという印象を與えるが、やはり一典型というからにはいくつかのブルジョワジーの類型を示してほしい。それにより中國ブルジョワジーの中での、あるいは中國資本主義の中での虞の位置が明瞭になるのではないだろうか。このことは蔣介石政權の性格をどう考えるかということとも密接に關連してくる。本稿では蔣介石との同郷による個人的關係が、たびたび指摘されている。虞と國民黨政權との關係を考える上で重要な要素であろうが、虞らのめざす中國資本主義發展のための秩序形成の構想と國民黨の構想がどう關係しているのか、このことについて寧波幇と廣東幇との相違・對立があったのか否かなどが考えられるべき課題として殘されていると思われる。

林原文子「宋則久と天津の國貨提唱運動」

本稿は天津における義和團事件以降五四運動期にいたる國貨提唱運動の發展・變化を、宋則久の活動を中心に明らかにしようとしたものである。本シリーズ第一函の片岡一忠「天津五四運動小史」において、天津における五四運動の全體的な動きについて述べられているが、本稿はその中でのブルジョワジーの運動とその背景について考察したものである。

從來日本の中國近代史研究上でもほとんど無名であったと思われる天津の個性的なブルジョワジー宋則久とその活動の事績をほりおこしたのは本稿の大きな收穫である。林原氏の一年半にわたる天津留學中の史料蒐集の成果が十分生かされている。その意味では現在日本で閲讀できる文獻だけでは書けなかったのがこの論考である。

宋則久は天津有數の呉服店の經理であったが、義和團事件後の天津の急激な變化の中で、後の國貨提唱運動の理論的根據となる「商戰」の必要性を認識し、新政の一環である實業新政に積極的に參加していく。林原氏は新政について、清朝側の企圖は「『改革』に名を借りた、自己の軍事的、經濟的基盤の再建にすぎなかったが、それに關係した人々がすべて同じ意圖をもっていたかどうかは別問題である」(一五頁)と指摘している。新政時期をこのような廣がりの中でとらえることは、後の歴史展開との關係で重要であろう。ただ清

朝政府の意圖を否定的にみるあまり、清朝が「自己の延命策に汲々たる有様で、保護關税を設定することなど望むべくもなかった」（一八頁）となると、いささか非歴史的評價といわざるを得ない。およそ關税自主權そのものが奪われているこの時期に、たとえ清朝政府にその意圖があったとしても、保護關税の設定など問題になりようがないのである。

それはともあれ、この新政期を通じて「強權による實業振興がきわめて脆弱なものにすぎない」ことを認識した宋則久は國民一人一人の自覺を促す國貨提唱の活動を「商賈上の利害を捨て」て實踐していき（一九頁）、その經驗の上にやがて五四運動に參加していく。

天津の五四運動期におけるブルジョワジーの動向は、前掲片岡論文でも示されているが、本稿ではその組織狀態などがより明らかにされている。ただし宋が天津の、ひいては中國全體のブルジョワジーの中でどのような位置を占め、特徴を持っていたかについては明らかではない。宋のような強い個性を持った資本家は當時の中國あるいは天津で、資本家の一つの典型とみなせるのか、あるいはきわめて特異な存在であったのであろうか。本稿の敍述からも國貨提唱の當初の段階では孤立的な存在であったことがうかがえるし、また五四運動の中での商人層の消極的對應も指摘されているが、そうであるとすれば、天津において宋がどうして指導的地位につくに至ったか、あるいはブルジョワジー全體の中での宋の占める位置などについてもっと言及して欲しかったと思う。

第三章の愛國布についての記述は國貨提唱の背景を考える上で重要である。論文全體の構成上からはバランスを缺くうらみがないでもないが、これまで斷片的にふれられてきた愛國布について、その發祥、傳播、生産情況を明らかにしたのは大きな成果である。

川井　悟「華洋義賑會と中國農村」

かつての革命運動史を軸とする中國現代史研究の立場からは、國民黨支配地域の農村改革運動に對してはあまり注意がはらわれず、まして進歩的意義を見出すことなどはありえなかった。そしてこれは國民黨評價と不可分のものであった。近年國民黨政權および政策に對する評價の轉換の動きもみられるが、川井氏の論考もそのような流れの中からうみ出されたと考えられる。

川井氏は華洋義賑會による合作社活動を多面的に分析し、生き生きとした表象を與えてくれる。一九二〇年代中國農村については、ある意味では平板なイメージしか持っていなかった評者にとっては、このような動きが存在していたこと自體が新鮮な知識である。さらに合作社といえば、いずれにしてもここで川井氏が批判しているような見方、すなわち地主・富農の鄕村支配に結果したに過ぎないのではないかという漠然とした觀念しか持たず、たいして注意も拂っていなかった者にとっては再考をを迫る內容である。

川井氏によれば合作社については戰前の研究では運營の不健全さ、地主・富農による操縱、救濟效果の乏しさなどを強調するのが通說であり、戰後においては研究はほとんどない狀態であるという。本稿執筆の動機はそのような戰前からの通說的理解にたいして一定の修正を迫ろうとするものである。

評者の視點はどうしても舊來の觀點からまったく自由であることは不可能であるので、川井氏からは舊いとみなされるかもしれないが、そのような觀點から二、三氣づいたことを指摘しておきたい。

華洋義賑會の中心的擔い手に關して、川井氏は外國人については宣教師、YMCA關係者、銀行家、ジャーナリスト、大學教授であり、中國人については、大半が歐米留學の經驗をもち、教育、外交、實業關係の仕事に從事している人々であり、そのような人々について「西洋から押しよせた波が中國にうちよせる緣（フリンジ）に存在する人々」すなわち「緣勢力」として、「結局、華洋義賑會は、中國經濟が半植民地的に歪んだ構造を有している條件下で、西洋勢力との接觸點に位置する緣勢力（中國人および外國人をともに含む）が、より內陸部の農村、あるいは半植民地的經濟體制の下で一方的に收奪され窮乏化する一途の農村社會、あるいはまた西洋の近代化の波の緣外に位置する社會、に對して、その窮乏狀態あるいは潛在的な飢饉狀態に改良を加えんとした時、作りあげた組織であった」（二九～三〇頁）と總括している。

たしかに表象としてあるいは比喩的表現としては、このような「緣」の存在は理解できよう。しかしこの「緣」は本稿でも比較的重要な概念に屬すると思われるので、もう少し檢討されてしかるべきであろう。これは單なる地理的概念か、それとも文化的內容を含むのか、さらには社會經濟的關係までを包括した把握の仕方なのか。中國農村社會について川井氏は「緣の內側に存在する」といい、「西洋の近代化の波の緣外に存在する社會」ともいう。視點をどこにすえるかによるから、緣の內か外かという穿鑿はこの際措くとしても、「西洋の波」ということで何を意味するのか、「緣」により內と外が截然と區別できるのかという疑問は殘る。

市場關係を通じて資本主義世界に中國經濟がくみこまれ、たとえば本函の他の論文でも指摘されているような資本主義國の生產物が農村市場にまで流入していたこと、程度・範圍の問題はあるとしても、キリスト教の布教活動も農村にまで及んでいたことはいまさら指摘するまでもないだろう。川井氏自身も「半植民地的經濟體制の下で一方的に收奪され窮乏化する一途の農村社會」といっているが、一方的に收奪している主體は何なのか、この收奪と「近代化の波」はどのような關係にあったのか。帝國主義の市場關係を通じての中國農村支配という把握の枠組に川井氏がどのような評價を持っているのか、總じていえば、本稿では帝國主義支配に對する指摘が稀薄であるが、それは捨象されているのか、それともこのような把握の仕方に批判的見解を持っているのかはっきりさせてほしいところである。

次に合作社と農民の階層の關係についてである。從來富農・地主が合作社を壟斷し、貧農層は加入を阻まれていたとみなされてきた。これにたいし、川井氏はこのような傾向は一九三四年以降の傾向であり、華洋義賑會の指導下にあった時期にあっては、一～四〇畝の土地所有農民層が中心であったと主張する（五一～五二頁）。從來一括されて處理されていた統計を、時期を區分してそれぞれの時期の特徵を明らかにしたのは本稿の功績であろう。そのことを確認した上でなお、階層別構成比から、階層間の勢力關係が直ちに證明できるか疑問が殘る。氏は地主・富農の比率が小さい合作社においては「地主と富農が合作社を壟斷することは、社員大會がきちんと開かれ、民主的な運營がなされている限りかなりむずかしい」という（五三頁）。舊社會の傳統的思想と人間關係の中に生きてきた農民たちにとって「民主的運營」がそれほど容易になじめることであったろうか。氏によれば、「同族關係をはじめとするもろもろの人間關

係にかわって、相互に親しみ、助けあうという、新しい合作社的人間關係を作ること」が華洋義賑會がめざしたものであり、「實態をみる限り、この企圖はかなり達成されたように思われる」と評價している（五九頁）。評者は頭からこのことを否定する積りは毛頭ないが、それにしても樂觀的過ぎるという印象は免れない。もし眞にこのような社會關係が形成されたとしたら、それは革命的な變革であり、舊社會とのはげしい摩擦、矛盾をひきおこさずにはいなかったであろう。

もう一つの問題は、一九二〇年代という時期に、合作社運動が行なわれたということに關してである。一九二〇年の華北大飢饉が契機となったことは事實として承認できるが、契機が契機として現實化する國際的・國内的條件はどのようなものであったろうか。これは本シリーズのテーマとどう關わるかということにも連なり、他ならぬ五四運動の直後に、氏のいう「緣勢力」による救濟活動が開始され、しかも一時的活動に止まることなく、繼續的な運動として展開されたことの歴史的意味が問われるべきではなかろうか。一九二〇年代という歴史背景が、敍述の中でもう一つ浮びあがってこないというのが率直な印象である。

以上のような問題を感じるにしても、從來の通說的理解に修正を迫る本稿は、今後の中國農村、國民黨の農業政策にたいする研究に一つの方向を示していると思われる。

以上、個別に氣づいた點を述べてきたが、紙數もつきたので、一點だけ全體にかかわる論點をあげておこう。それは中國のブルジョワジーにたいする評價について森氏と他の諸氏との間に際だった差異があることである。川井氏は直接この問題にはふれていないが、全國經濟委員會に關する前稿（本誌四〇卷四號）にみられる國民黨政權に對する、および本稿での「緣勢力」に對する評價からみて、基本的に後者の觀點に連なると判斷する。森氏の評價は最も低く、情況追隨的で、新しい歴史的段階をきり拓く主體を構成する一階級とはみなされていないと思われる。その意味では革命運動史を軸とする研究のブルジョワジー論の枠組をひきついでいるといえよう。これにたいし林原氏は民族ブルジョワジーに高い評價を與え、陳氏は從來の買辦資本觀をくつがえす論點をうち出している。このような違いは現在の研究情況の反映でもあり、今後更に議論が深められるべき課題となろう。

ここまで書き進んできて、結局私には評者として要求されるこの方面での研究蓄積に缺け、適任ではなかったと痛感せざるを得ず、輕々に書評をひきうけ、結局素人の感想の域を出ない文章を書き連ね、貴重な誌面を空費する結果になったのではないかと恐れている。また四篇の力作にたいし均等に目配りできず、評者の興味で、均衡を缺く結果になってしまったことを御寛恕願いたい。

一九八三年十二月　京都　同朋舍

A5版　五六一頁　八八〇〇圓